

Alphart は二度死ぬ

— „Buch von Bern“ におけるある矛盾について —

寺田 龍 男

I 問題提起

13世紀の後半に中世高地ドイツ語で成立したとされる¹⁾英雄叙事詩 „Buch von Bern“ — これはその 10103 行目と 10129 行目に出る表現から次第に多く用いられるようになった呼称で、以前はもっぱら „Dietrichs Flucht“ と呼ばれていた — には、奇妙なことに以下のような場面が相次いで描かれている：

Alphart der mære/ lief von dem Bernære/ den küenen Pitrunge an/
Pitrunc der küene man/ ouch gegen Alpharten lief./ si holten ûz ir
herzen tief/ zwêne slege vreislich./ Pitrunc der ellensrich/ traf Alpharten
ê./ daz der recke nimmermê/ von der stat kom gesunt./ alrêst wart dem
Bernære kunt/ daz allersterkiste leit/ daz im ie geschach, als man seit.

※ 本稿は、昭和 60 年度文部省在外奨学金給費学生としてドイツ連邦共和国ミュンヘン大学に学んだ際、Michael Curschmann 教授のゼミナール „Nibelungenlied und Klage im Kreis der germanischen Heldendichtung“ (1985 / 86 年度冬学期) で同教授の指導を受けた研究の成果の一部をまとめたものである。Curschmann 教授をはじめ、本稿執筆のためにお世話をいただいた Hans Fromm 教授、Claudia Beil 氏、浜田敏道氏、そして特に Otto Putz にはあつく御礼を申し上げます。

1) 最近の研究者の見解：Curschmann (1976, S. 381 f. および 1986, S. 188) が 1250 年頃とみるのに対し、Hoffmann (1974, S. 162) は 13 世紀下旬、Schupp (1979, S. 85) は 1282 年頃からの数年間、そして Kuhn (1980, Sp. 119) および Wisniewski (1986, S. 134) は 1275 年頃か 1295 年頃とみなし、Rosenfeld (1984, S. 436) および Gottzmann (1987, S. 111) は 1280 年頃とみなしている。

(v. 9519 – 9532)

(誉れ高きアルプハルトはベルン公のもとを出て勇士ピトルンクに向かっている。勇者ピトルンクもアルプハルトに向かった。二人は共に心の底から出た怒りを一撃にこめた。しかし強者ピトルンクがアルプハルトを先にとらえたので、その勇士はもはや生きてその場から帰ることができなかった。まっ先にベルン公にこの災難が知らされたが、これは彼にとってはかつてない大きなものだったと伝えられている。)

der sluoc dem Bernære/ ahte ze tôde sîner man,/ die tiursten die er
mohte hân./ wer die wæren, die wil ich/ iu nennen: nû vernemet mich./
daz eine daz was Helmschart,/ daz ander was Alphart,/ daz drite her
Nêre. (v. 9694 – 9701)

(彼 [=誉れ高きラインヘーア] はベルン公のもつ最強の家来を8人も打ち殺した。それらが誰であったか、これを皆の衆にお教えしよう。さあお聞き下され。それはまずヘルムシャルト、次にアルプハルト、三人目がネーレ殿であった。)

勇士 Alphart が約 200 行の間をおいて二度登場し、それぞれ奮戦するが結局ともに討ち死にしているのである。こうした誰の目にも明らかな矛盾を初めとして、当時の「英雄叙事詩」(Heldenepik) や「(いわゆる) 吟遊詩人の叙事詩」(Spielmannsepik) というジャンルに属する作品には多くの、また様々なタイプの不一致点がみられる。そこで本稿では、Alphart が二度死ぬという矛盾がなぜ生じたか、あるいはそうした記述がなぜ写本でそのままにしておかれたか、そして聴衆にも(おそらく)受け入れられていたのはなぜか、という問題について考え、併せてその他の様々な不一致点を解明するための足掛りをつくりたい。

II Alphart の人物像 —— 同名異人か？

一般に、この Alphart は同名異人とはみなされていない。Hoffmann や Wisniewski も彼の二度の死をはっきり矛盾と認めている。²⁾ だがこうした見解をすぐには自明の前提とせず、他の作品に出る Alphart 像と比較することで新たな視点を得ることができる。そこでまずこの人物が中世当時どんなイメージを人々に与えていたかを、„Buch von Bern“ と他の作品の中の描写をもとにして考えてみる。

1. „Buch von Bern“ の Alphart

この作品では先に挙げた箇所他に何度も Alphart が登場する。

- ① v. 3010: Dietrich への援軍として Alphart 登場。
- ② v. 5582: Amelolt が Bern (今日の Verona: ヴェローナ) を奪い返したあと、その守備を Alphart に委ねて Etzel (Attila: アッチラ大王) の城へ向かう場面。
- ③ v. 5865: 使者 Volcnant は Dietrich に会い、誰が Meilân (Meiland: ミラノ) から来て助勢するかを告げる (Alphart はそのうちの一人)。
- ④ v. 6323, 6332, 6339: Alphart が密かに敵情を視察していたというくだり。
- ⑤ v. 8309: Dietrich らは敵を十分引き寄せせる作戦だったが、Wolfhart が飛び出し、これに Alphart らも続く。
- ⑥ v. 8614: Alphart らは Dietrich とともに敵の背後にまわる。
- ⑦ v. 9519 – 9535: Alphart は敵の Pitrunc に戦いを挑むが逆に倒される。Dietrich の嘆き。(上記の引用箇所)
- ⑧ v. 9558: Pitrunc が Dietrich に仇討ちされ、Alphart の上に倒れる。

2) Hoffmann a. a. O., S. 170 および Wisniewski a. a. O., S. 131.

3) 本文では 8 名と記されているが (v. 9695), 実際には 9 名の名が挙がっている。

- ⑨ v. 9700: Reinhêr に殺された 8 名 (9 名?)³⁾ のうちの一人として Alphart の名が挙がる。(上記の引用箇所)
- ⑩ v. 9896 - 9934: 討ち死にした家来たち, とりわけ Alphart に対する Dietrich の嘆き。(これは Alphart の二度目の戦死⑨の描写に基づく)
- ⑪ v. 10090: Bern 公は Alphart の死に再び涙する。(同上)

このように Alphart の登場する場面は, いわゆる Dietrich の二度目の逃亡と合戦 (v.7219 - 10152) の部分⁴⁾で圧倒的に多い。

本稿の考察の一次資料である „Buch von Bern“ は, ゲルマン民族の英雄 Theoderich — ここでは Dietrich von Bern — を主人公にした物語である。彼は実在の人物で, 歴史上は西暦 476 年に西ローマ帝国を滅した Odoakar (オドアケル) を十数年後に倒した東ゴートの一部族の王だった。⁵⁾そしてこの人物の若い忠臣として Alphart は描かれているが, 多少血気盛んな様子が窺える他は, むしろ印象が強くないといえよう。

2. „Rabenschlacht“ の Alphart

この作品では冒頭で Dietrich が Alphart の死を嘆いている:

Des phlac er alsô verre,/ als mir ist geseit,/ von Berne der herre,/ dem
was getriulichen leit/ umb den küenen Alpharten./ er beweint ouch
dicke den starken Helmscharten. (Str.10)

(私の聞いたところでは, 彼 [=ディートリッヒ] はこのような状態 [=故国と多

4) 区分けは Curschmann (1976, S. 359) に従う。

5) ただ数百年にわたる口頭伝承の過程で実際の人物の行動や事実関係はいちじるしく変容をきたし, Dietrichepik というジャンルは史実とは大きく異なる筋を展開した。たとえばこの作品の中で Dietrich はその伯父 Ermenrich — これは歴史上は 375 年頃フン族に追われて死んだ王で, 実在の Theoderich の祖先にあたる — に追放されたことになっている。また Theoderich とフン族の王 Etzel が実際に活躍した時期は重なっていないのに, 作品内の両者は盟友関係にある。

くの家来・民を失ったことを悲しむ] がずっと続いていた。このベルンの殿様には勇敢なアルプハルトの死がひどくこたえていた。また強者ヘルムシャルトのこともしばしば泣き悲んでいた。)

Helmschart も現われている点からみて、この記述は先の — „Buch von Bern“ に出る Alphart の二度目の死と関連していることは間違いない。更に言えば、この二カ所は同じ (詩的) 事実を基にしたくざりとみるべきである。„Rabenschlacht“ の作者/編者が „Buch von Bern“ を直接参照したわけではなからうが、⁶⁾ この関連性はそこに書かれてある内容のもとになった素材を彼が既に知っていたことを意味するからである。ただこの人物が、先の „Buch von Bern“ の中に出たような矛盾を意識していたかどうかはわからない。ひょっとすると彼は片方のエピソードだけを知っていたのかもしれないし、あるいは取捨選択を行ったのかもしれない。

これらの作品は記述形式がまったく異っている。„Buch von Bern“ は基本的に単なる脚韻詩行形式だが、„Rabenschlacht“ は 6 行詩節形式である。おそらく異った人物が、それまで長い間口頭で伝えられてきた伝承をそれぞれまとめたのであろう。⁷⁾ (その際彼らは、部分的には既に書かれてあったものも資料として用いたに違いない。) だがこれらの作品が収められている現存 4 写本はいずれも両者を („Buch von Bern“ → „Rabenschlacht“ の順で) 並べて配置している。それらのうち一番古い写本 R が既に 13 世紀末に書かれていることからみて、⁸⁾ 両者がその成立当初から、あるいはその後の早い時期に既に密接に結

6) 最近の研究によれば „Rabenschlacht“ の方が „Buch von Bern“ より若干早く成立したと考えられている。Vgl. Hoffmann a. a. O., S. 162; Rosenfeld a. a. O., S. 435 f.; Wisniewski a. a. O., S. 139.

7) この点について Hoffmann (a. a. O., S. 162) は詳しい論拠を挙げている: „Buch von Bern“ の作者/編者は舞台であるイタリア北部の地誌に詳しくかつ軍事に関しても知識があるが、„Rabenschlacht“ ではそれらについての経験が殆んど窺えない。

8) Kuhn a. a. O., Sp. 116.

びついていたことは間違いない。両方の作品⁹⁾をそれぞれ最初に聞いたのが同じ Publikum だったと想定しても決して大きな誤りとはならないだろう。仮に別々の聴衆だったとしても、相互の内容の関連性からみて、これらの作品・作者／編者・聴衆を囲む世界を一定の枠でくくることはできよう。その中のある有力者が、文芸に心得のある者にひとつの作品をまとめて羊皮紙に書き記すよう要請した。その際どのような作品に仕立て上げるかはその時々状況次第だった。Publikum の好みや時代・地域ごとの流行もあったろう。しかし依頼者の意向が一番の重みを持っていたことは間違いあるまい。¹⁰⁾ だからたとえば、„Buch von Bern“ の冒頭のほぼ 2500 行に及ぶプロローグ——ここでは Dietrich von Bern の祖先がその求婚譚等とともに系統的に、しかし今日の日にはいささか冗長に紹介される——も、依頼者を初めとする聴衆の期待や関心に応じて書かれたのである。¹¹⁾

Alphart の登場するくんだりも、このような状況を踏まえて光をあてると背後の様相が浮かび上がってくる。たしかに „Rabenschlacht“ はおろか „Buch von Bern“ でも彼に関する記述は多くない。両作品の「長さ」を考えると、¹²⁾ むしろ微々たるものにすぎない。しかしこの「短さ」は、決して聴衆の Alphart に対する関心の薄弱さを意味するのではない。なぜならその関心が、彼を主人公にした作品を独立させてもいるからである。

3. „Alpharts Tod“ の Alphart

Alphart を主人公とするこの作品は、„Buch von Bern“ で垣間見られた血

9) 口承で受け継がれてきたものをまとめた作品では、「オリジナル」という概念は Brackert (1963, S. 97, 165, 169) 以来使われなくなりつつあるが (Vgl. Fromm 1974, S. 64, 70 f.; Heinzle 1978, S. 100 等), ここではさしあたり写本 R の典拠を考えることにする。

10) たとえば Bumke 1986, S. 638 f.

11) Vgl. Hoffmann a. a. O., S. 163 及び Wisniewski a. a. O., S. 137.

12) „Buch von Bern“ は 10152 行, „Rabenschlacht“ は 1140 詩節あり, これを自由詩行に換算すると 6840 行になる。

気盛んなイメージをさらに大きく、彼の基本的性格として、またそれゆえに彼の死を招くものとして描いている。その前半で主人公の悲劇的な死に致るまでの活躍が語られるので、以下にその部分の梗概を記す：

Rom の皇帝 Ermenrich は甥 Dietrich von Bern を討つべく Heime を遣わすが、Dietrich のなぜかの問いに、かつてその家来として恩恵に俗し忠誠の誓いもした Heime は答えられない。結局その場は和解し、Heime 及び Witege (これも同様 Dietrich のかつての家来) は Dietrich と決して刃を交さぬことを確認する。しかし Ermenrich は戦陣を整え、Dietrich もこれに応じる。若い Alphart は一人で前哨に立つことを願い出る。幾多の諫めも聞き入れずに飛び出した甥を助けるため、伯父の Hildebrand があとを追い、変装して一騎討ちで彼をおさえて帰そうと企らむが、逆に負けて引き下がる。Alphart はその後敵方の前哨 Wülfing から 80 名を一对一で次々と倒し、8 名が辛うじて逃れる。Ermenrich は再度前哨を求め、結局 Witege と Heime が出る。Alphart は二人の背信をなじり、一騎討ちで Witege に勝つが、剣を失った相手の命は奪わない。Heime が和解を申し出るが、Alphart は応じない。しまいには彼は二人に同時に襲いかかられ、Witege に刺されて死ぬ。¹³⁾

一見して明らかのように、ここでの Alphart の死に方は „Buch von Bern“ のそれとまったく異っている。Witege と Heime はともに „Buch von Bern“ と „Rabenschlacht“ にも登場するが、Alphart の死とは何ら関係がないのである。最近の研究によると „Alpharts Tod“ は 1250 - 1280 年頃に成立したとされ、¹⁴⁾ 他の二作品とほぼ同時期ではあるが、Alphart の死に方に関する限り、こ

13) 後半では Dietrich 側がいくつかの戦いの後に勝利をおさめ、Ermenrich, Witege, Heime らの逃走する様子が描かれる。なおこの前半と後半が初めから同一の構想のもとにあったかどうかについては古くから論じられているが、未だに定説はない。Vgl. Zimmer 1972, S. 19 - 26; Hoffmann a. a. O., S. 175 f.; Wisniewski a. a. O., S. 130.

の作品は他と何の関連もなしに成立したようにみえる。しかし de Boor らは、この作品が（他の点で）„Buch von Bern“ の内容を前提とし、しかもこれより成立が早かった可能性が大きいと考えている。¹⁵⁾ そうなると、„Buch von Bern“だけを、あるいは „Alpharts Tod“ だけを中心に据えては、Alphart が当時の人々にどんなイメージを与えていたかという問題に解答を出すことがきわめて困難になる。

なぜこのような現象が起きたかについては後に論ずることにして、ここで de Boor の考察を続けて紹介しておく。¹⁶⁾ 彼によれば 13 世紀には、このような英雄叙事詩が文字で Buchepos として伝えられるのと平行して、短い歌謡伝承が古くから継続して存在していた。¹⁷⁾ そうした口承文芸の伝統の中である人物が Alphart を主人公とする作品をまとめあげ、歌うようになった。だからこの人物は „Thidrekssaga“（きわめて古い起源をもつ北欧版 Dietrich 物語 — 但し文字でまとめられたのは 1250 年頃）には載っていないのである。de Boor の見解が正しければ、この人物は Dietrich, Hildebrand らと比べていわば二次的な、派生したものといえる。¹⁸⁾

英雄 Dietrich von Bern を主人公とする作品は多数あり、それぞれが彼に様々な活躍をさせているが、作品間で行いが違ってもそれは矛盾とはみなされない。しかしここまでみてきたような Alphart の三様の「死に方」は、今日の目にはやはりあたかもみな別人だったかのように映る。特に „Alpharts Tod“ のようなパターンは次に引用する作品でも暗示されており、少なくともこのケースはある程度はっきりしたイメージをもって当時の人々に認知されていたと考えられる。

14) たとえば Zimmer a. a. O., S. 107 f.

15) de Boor 1962, S. 155; Hoffmann a. a. O., S. 175.

16) de Boor a. a. O., S. 155 f.

17) この点に関しては註 32) も参照されたい。

18) ちなみに Hoffmann (a. a. O., S. 174), Rosenfeld (1978, Sp. 259; 1984, S. 440) らは „Alpharts Tod“ について ‚Sproßdichtung/-epos‘ という表現を用いている。

4. „Der Rosengarten zu Worms“ (Fassung D) の Alphart

1280 年以降に成立したとされる¹⁹⁾この作品では、Worms の王 Gibeche が Diertich von Bern らに対し、美しいバラ園を守る勇士たちと戦うよう挑発し、Dietrich らがこれに応じて最終的に勝つさまが描かれている。その末尾で、戦いを終えた Dietrich 側の勇士の一人 Witege が Ermenrich 王の許へ行くこととする際に次のような会話がなされる：

623 Dô sprach gezogenliche von Bernê her Dietrich :
 ,welt ir dann hinnen riten ze küneç Ermenrich,
 sô gedenket an die eide, die ir mir hât gesworn,
 darane sült ir niht wanken, ir recke hôchgeborn.⁴

624 ‚Jâ, wolte ich wanken, vürste *vil gemeit*,
 mîn lip der sî verwâzen, briche ich den eit.⁴
 dannen vuor *dô Witege* ûf der selben vart.
 daz kam sider ze leide dem jungen Alphart.

([623] するとベルン公ディートリッヒ殿は丁寧に言われた。「そなたがこれからエルメンリヒ王の許へ行っても、私にした誓いを忘れないでもらいたい。そして素性高き勇士よ、その誓いのことで動揺するでないぞ。」[624]「もちろんです。もし私が動揺することがあれば、誉れ高き殿、あの誓いを破ることがあれば、この身は滅ぼされましょうぞ。」やがてヴィテゲは自らの道を行った。このことが後に若きアルプハルトの災いとなったのである。)

この、Alphart が Witege に殺される運命にあることを仄めかすくだりは、明らかに „Alpharts Tod“ に描かれたエピソードを前提にしている。de Boor が述べたようにこのパターンが古くからの伝承にはない、いわば新しく作られた

19) たとえば Hoffmann a. a. O., S. 184.

ものだとしても、いやそれならばなおさら、この二つの作品は近い関係にあったと言えるだろう。Zimmer は „Rosengarten“ に出る Alphart のモチーフを、„Alpharts Tod“ を前提とする後代の埋め込み (Interpolation) かもしれないと考えているが、²⁰⁾ 仮にそうだとした場合 (作品や写本の成立年代の前後関係も含めて) ここでは大きな問題になるまい。たしかにこうした作為的行為によって聴衆が初めてこのエピソードを知った可能性はある。しかしここは単なる暗示であり、その後の成り行きや結末が記されていない。こうしたテキスト外のことを暗示する表現は、むしろ一般的には朗詠する者 (Vortragender/Vorleser) と聞き手 (Publikum) の間に何らかの対応する共通認識があることを前提にしていると解するべきである。それゆえこの共通認識 — Alphart が Witege に殺されるということ — が、当時の人々の間にある程度の広がりをもって根づいていた可能性がまず一方にある。だがそうした認識は「Alphart の死」に関するものだけではない。Witege という人物が「かつての主君に刃を向けた者」であるということも Dietrich の歴史叙事詩 (historische Dietrich-epik — これは „Buch von Bern“, „Rabenschlacht“, „Alpharts Tod“ から成る) には広く行き渡っているのである。²¹⁾ だから彼が裏切り者となるために殺すのは、つまり昔の仲間に殺されるという災いに陥るのは、Dietrich の忠臣であればよく、ひとまず Alphart でなくてもよかったかもしれない。„Rosengarten“ では Alphart は上記引用例の他二カ所に出る — 詩節 53 で Wolfhart の弟として、詩節 58 でその兄に自分も Rhein の地に行くべきかを尋ねる — が、いずれも重要な役割を担っていない。武士としてはいわばその他多勢の一人にすぎないのである。²²⁾ 他方先の引用箇所では、Alphart の名より、Witege が Dietrich の許を離れるというテーマの方がはるかに重要である。Dietrich とともに最後まで戦った家来として、この作品の中で彼の占める位置がきわめ

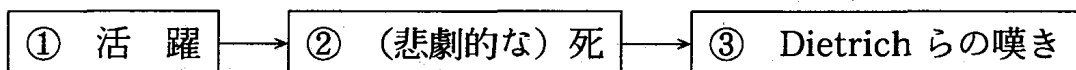
20) Zimmer a. a. O., S. 10.

21) たとえば „Buch von Bern“ v. 7133 ff. および 7712 ff. また „Rabenschlacht“ Str. 364, 387 f. 等。Vgl. de Boor a. a. O., S. 151; Wisniewski a. a. O., S. 44, 46.

て大きいからである。

„Buch von Bern“, „Rabenschlacht“, „Alpharts Tod“ の項でもみたように、若い Alphart という人物が — 誰によるにせよ — 殺されるという悲劇的運命をもつ者と中世の人々にみなされていたことは、ここまでで既に明らかになった。死んだあとで Dietrich らが嘆き悲しむ情景が描かれているのも決まりきったパターンである。この人物の名を聞いた当時の人々は、「死に方」こそ異なれ、やはり「悲劇の人」を連想したのだろう。このように考えると、この人物は「殺される」ことがまず重要であり、その際「誰によって」かにはむしろ二次的な意義しかなかったことが明らかになってくる。„Buch von Bern“でも状況は同じである。Alphart の死に方について、Wisniewski は「いくつかのまったく異ったヴァージョン (Version) が並行して存在していたにちがいない」と述べたが、²³⁾ このヴァージョンとは、別に固定した、歴史的な重みを伴うものではなく、むしろ流動的で、ある点では互換性さえあったのである。これはたとえば以下のように図式化できる：

Alphart のモチーフ



こうした語りの「パターン」²⁴⁾ が、いわば Alphart の行動様式として当時の (少なくとも一部の) 人々の間にあった。そしてこれが様々なヴァージョンの土台となったのである。このうち①と②については、それぞれどんな活躍をさせる

22) 兄の Wolfhart が Witege を妬み、結局これが原因で Witege が Dietrich の許を離れるという前提の上に Alphart を詩節 624 に登場させている。

23) Wisniewski a. a. O., S. 131.

24) これは「求婚譚」(Brautwerbungsschema) 等の形式とも比べうるし、„oral poetry« 学派のいう、Erzählshablone にも通じる。Vgl. Haymes 1977, S. 20 f. なお註 32) も参照されたい。

か、またどんな死に方をさせるかについて詩人／作者にある程度の自由があったことはまちがいない。——たとえば聴衆の好みに応じて演者が自分の蓄えた「パターン」を適宜使い分けたりする等のケースが、異ったヴァージョンの成立・定着する契機になったかと想像される。

5. „Der Marner“ の Alphart

„Der Marner“ XV, 14, v. 269 ff. に対応する Kolmar 写本には次のような文がある： (der sibende wolde etewaz) von wittich und von heimen strit von des jungen albrandes tot. ([七番目の語りは] ヴィテゲ, ハイメの戦い, そして若きアルブランドの死について [のものにしよう])

これについて Holtzmann は, ‚Albrandes‘ を, ‚Alpharts‘ と読み替えれば „Alpharts Tod“ と関連ができるとみているが, いささか無理な想定だろう。²⁵⁾

以上により, Alphart の二度の戦死はやはり同名異人によるのではないと結論づけられる。²⁶⁾ そこでこれまでの議論をふまえ, 特に先にみた語りの「パターン」の存在を前提にして次章で再び矛盾一般の問題に戻ることにする。

III 同一人物が二度死ぬという矛盾の研究

本題に入る前に, このような奇妙な現象は——少なくとも中世までの文学で

25) Holtzmann 1860, S. 445. Vgl. Zimmer a. a. O., S. 10; Curschmann 1980, S. 34. ただし Albrant という名前自体は „Rabenschlacht“ にも出る (Str. 736)。

26) 同名異人にまちがわれる危険性自体は „Buch von Bern“ の作者／編者も意識しており, その可能性が大きい場合に彼は特別に注釈をつけている: und sin bruoder Karle/ (den guoten Karle mein ich niht, / von dem man saget manec geschiht) (そしてその弟のカール(多くのことが語られているあの良きカールのことではない)が [エルメンリヒ王の側にいた]——v. 8650 – 8653) この注釈はおそらく, 知名度が抜群に高い英雄カール大帝を考慮してのことであろう。従ってこの例は, „Buch von Bern“ の Alphart を同一人物と認めるための傍証になりうる。

は — それほど珍しくはないということをまず指摘しておきたい：

例えば Homer の „Ilias“ (『イーリアス』) の 5 章, v. 576 f で Pylaimenes (ピュライネメース) が討ち取られる。ところがこの人物は 13 章, v. 658 f. で再び登場し、息子の亡骸に涙しているのである。またフィンランドの叙事詩 „Kalewala“ (『カレワラ』) の 31 章で, Kullerwo (クレルウォ) の父親が殺されているにもかかわらず、後の 34 章では両親ともに生きていと伝えられる。さらのロシアの英雄叙事詩フィリーナ (Bylinen) のある作品は, Aljoscha Popowitsch なる勇士が童の子 Tugarin を田舎と Kiew の町で続けて二度殺す記述を行っている。²⁷⁾

このような例は一般に、長い間口承で伝えられたものがある時文字で定着させられた際に起きた問題であることをまず認識しておく必要があるが、こうした現象は最近初めて注目を浴びるようになった訳ではなく、古くから — 必ずしも説得力のある考察が出されてはいないが — 論じられてきた。それらの研究の中で出た根拠としてはおおむね次のようなものがあつた：

- ① 二つの典拠を混同した。
- ② 先に表示したことを忘れた。
- ③ 何らかの理由で作者が前後の論理的関係を確認しなかったりあいまいなままにした。
- ④ 作者が気づかずに誤った表現を用いてしまった。²⁸⁾

これらに共通するのは、「作者」(Dichter/Autor) ないしは「編者」(Bearbeiter/Überarbeiter/Redaktor)²⁹⁾ にその「誤り」の責任が帰せられていることである。①から④の現象はおそらく実際に起きたであろうし、これらで本稿の問題にある程度の説明をつけることも可能である。しかし中世当時、こうした矛盾

27) Bowra 1964, S. 348. そのほか Heinzle (a. a. O., S. 167) も同様の例をいくつか報告している。

28) 以上 Heinzle a. a. O., S. 168. Vgl. Jiriczek 1892, S. 153 f.

が今日とまったく同じように「誤り」と認識されていたかどうかは疑問である。明らかな誤りと気づかれたものの、そして改めようとしたにもかかわらず何らかの理由で——たとえば羊皮紙の高価さゆえに——、文脈の混乱を修復しえずにおいたままのケースはあったかもしれない。しかしそのような可能性を割り引いても、テキストに出る矛盾を作者／編者の誤りに帰すことのできない例がある。たとえば „Kudrun“ では、同じ軍勢の兵力が最初 3000 人いることになっていた (Str. 282) にもかかわらず、後に 700 人しかいないことになり (Str. 408), しまいに若干増えて 1000 人いるという表現がみられる (Str. 455)。この現象は、「あまりにも多い軍勢では勝っても武勇とならず、またあまりにも少ないと逆に勝ちが信じられない」ことによるものと推測されている。³⁰⁾ „Kudrun“ の語りでは、元来——今日の基準では——一致しているべきものを揃える努力がなされていない。ここではすべてが整合し、細部が問題なく全体にあてはまっているかどうかは、ある程度までどうでもよかったからである。³¹⁾ つまりこの作品では、全体構造よりも個別の記事により大きな注意が払われており、前後の一貫性はむしろ二次的なものだったと考えられる。

こうなると、先に挙げたかつての一般的な論拠とは別のものをさがさなければならぬ。先の 4 項目は、現象自体をある程度説明できてもその理由づけに欠陥がある。Alphart の二度にわたる死についての詳しい研究はまだないが、ここではそれを単なる特殊な、個別的な問題としてとらえるのではなく、できるだけ、中世の英雄叙事詩にしばしば現われる同類の現象の一典型として考察したい。そこで矛盾一般についての最近の研究を以下にとり上げる。

29) これらの概念はともに、口承伝統文芸が文字によって定着をみたがゆえの、従ってその作業をした人物の主体性がどこまで発揮されたかわからないが故の不十分／不適切な表現である。これは、英雄叙事詩というジャンルで「オリジナル」という概念が用いられなくなりつつあることと密接に関連している。(先の註 9) を参照されたい)「文字化」した人物をどう定義するかについてはまだ定見がないので、Heinzle (1978) も様々な表現を用いざるをえないでいる。

30) Stackmann 1980, S. XVII.

31) Ibid., S. XVI.

いわゆる《theory of oral-formulaic composition》³²⁾を分析の礎とし、英雄歌謡・叙事詩成立の前提となる「口承伝統」(mündliche Tradition) に注目した Bowra は、まさにその口承性ゆえに — つまり文字によらずに伝承されるがゆえに — これらの文芸は矛盾や混乱を内包かつ招来する宿命にあるとみた。彼によれば、詩人はある作品を朗ずる際に次に話すべきことに常に集中するため、前に述べたことを忘れてたり、あるいは逆にあとから話題となることを十分把握しないままに「目下の語り」に専念する。そのために前後の脈絡が途切れたり矛盾が起きたりして筋が乱れるという結果に至る。だがこれが口承文芸にとどまっている限りはさほど大きな問題ではない。詩人の気づかないことには聴衆も同様だろうから。しかしそのテキストがひとたび文字で固定されて鋭い批判の目に晒されると、それまでは取るに足りなかったものが突然重大な誤りになってしまうのである。³³⁾ こうした構想を基本にして、Bowra はいくつ

32) Germanistik にも大きな刺激を与えたいわゆる《oral poetry》の研究は、米国の M. Parry に始まる。彼は研究対象とする Homer の言語の特異性に気づき、それが口承文芸に基づくという自らの仮説を証明するため、1930年代にセルボクロアチア地方を初めとする各地で多くの口承叙事詩を集め、その文体分析を行った。その理論の前提は①文字によらない伝承 — 従って文盲の詩人の存在、②詩人はその叙事詩を一字一句たがえず暗誦するのではなく、核となる大筋以外は語りながらそのつど組み立ててゆく、③彼は語りを滞りなく進めるため、伝統によって形成された構成手段(一種の「パターン」: 単語・文のレベルでは Formel, さらに大きくテーマのレベルでは Erzählschablone)を用いる。この研究は弟子の A. B. Lord に引き継がれ、今日の Homer 研究の重要な支柱のひとつとなっている。中世ドイツ文学でも 1967年の Bäuml/Ward の研究を発端に多くの論文が出たが、最近はやや行き詰まりの観がある。その理由を端的に言えば、Formel の使用頻度の高さが必ずしも「口承性」を意味しない、つまりこの理論を裏づける確たる証拠がないからである。実際今日では Formel は、むしろ口承文芸を模した作品を構成するための文体手段であると一般に解されている。Bäuml もこの間に大きく方向転換し、たとえば最近の彼の „Nibelungenlied“ についての解説は初めの考え方とかなり異っている (Bäuml 1987, S. 167 f.)。しかしこの理論に、程度の差こそあれ、どちらかという批判的に対処した Curschmann, Fromm, Hoffmann, Heinzle らもその長所は認めており、《oral poetry》研究は今後も重要な基礎理論として生き続けてゆくであろう。ここで引用する Bowra の考えも、そうした重要なものの一部である。

33) Bowra a. a. O., S. 329.

かの矛盾を分析している。たとえば先の „Ilias“ の例で一度死んだ筈の Pylaimenes が生き返って(?)涙しているのは、「息子の遺体を搬送する時は父親が嘆き悲しむ」という情景がいわばきまりきったものであるがゆえに Homer が筋の中に取り入れた、と Bowra はみる。³⁴⁾ Homer は Pylaimenes が既に死んでいるのを忘れていたかもしれないが、息子の死を嘆くところで父親の名が挙げられていないことにも注目すべきであろう。³⁵⁾ 矛盾に気づいた誰か — 可能性としては作者よりむしろ後代の写本筆者であろう — が、それを顕在化させないために Pylaimenes の名を出すのを避けた、あるいは削除したかもしれないからである。Bowra はさらに Tugarin の例についても興味深い説明をしている。³⁶⁾ ある伝承物語が特別に人気をえて巷間広くゆき渡ると、それは数多くの詩人によってくり返し語られるようになる。するとこの物語は — 詩人が異なる場合はもちろん、原稿を読むのではないから同じ詩人でも語るたび毎に内容や表現に違いが出たろうから — いわゆるヴァリエーションを数多く生み出す。そしてそれらのうちのいくつかを誰かがひとつの新しい作品にまとめると、結果として奇妙なものができあがる。このケースでは、Aljoscha が Tugarin を田舎で殺す語りと Kiew でというものが既に普及していたのだが、これらが何らかの理由で続けて語られ、結果として矛盾が生ずることになったと Bowra は述べる。ではその理由とは何か。筋の混乱を承知で(?)このようなまとめ方をした原因は何か。それを Bowra は、語りの素材が大部分、伝統によっていわば神聖化されていたことにあるとみる。³⁷⁾ 個々の語り素材について、その細部の表現等は適当に処理することができる。しかし聴衆もおそらく既に知っていた題材の大枠は変えることができない。こうした問題を詩人が解決できなかった

34) Ibid., S. 329 f. なおこの点については、前章で挙げた語りの「パターン」も参照されたい。

35) 先の „Kalewala“ の例でも Kullerwo の父親の名は邦訳でみる限り一度も出ていない。

36) Bowra a. a. O., S. 348 f.

37) Ibid., S. 346.

時、あるいはしなかった時、今日の目には矛盾と映る事態が起こるのである。³⁸⁾

こうした考え方を Alphart の例にあてはめると、今までとは別の局面が浮かび上がる：Alphart の二度の死の場面は、どちらも彼だけを主要人物として扱っているのではない。とりわけ二度目の戦死の所では明らかに Reinher の戦いぶりに重きが置かれている。彼は兵 12,000 を従える武将であり、その行動はそれなりの長さをもって語られねばならなかったろう。しかも最初の場面で登場した Pitrunc が Dietrich von Bern に倒されたあとで、後の Reinher の登場・奮戦が予告されているのである：

daz wolde rechen sider/ Reinhêr von Pârîse. (v. 9560 f.)

(のちにパーリースのラインヘーアがその復讐をしようとした。)

この文からも Reinher の重要度は窺える。だがここで新たな問題が生じる。この二行が、ともに Alphart の倒れる場面を結びつけているからである。一見して、こうした矛盾を際立たせるような筋立ては不自然きわまりない。現代の文字文化に住む者の目には、「筋の混乱の予告」はあってはならないことに映る。しかし見方を変えれば、逆に第二の場面で Alphart の果す役割の「小ささ」が、そして相対的に Reinher の「大きさ」が明らかになる。詩人が Reinher の行動に大きな注意を払い、彼に討たれた多勢のうち一度死んだ人間を（うっかり？）登場させたのは、それだけ彼が「Reinher の奮戦譚」——これも先に挙げた語りの「パターン」を独自に持っていたかもしれない——を尊重し、原形を変えずにおいたからではないだろうか。

以上見てきたように、作品の背後にある口承伝統を考慮した Bowra の推論

38) こうした「神聖化」によって詩人はその原拠に対する尊重精神を植えつけられ、それが彼の語りの自由をもある程度拘束したにちがいない。但し詩人の方も自らの素材をやはりある程度自由に扱うことができた。これは《oral poetry》研究の重要な点のひとつである。

には大きな説得力がある。だがここでも問題がないわけではない。彼は口承文芸が文字で定着させられる過程を考慮に入れてないのである。Bowra が考察の対象としているのはあくまで作品が口頭で朗じられた場合、つまり今日写本に残されたテキストがそのまま詩人の口を通して語られる状況なのである。こうした考え方の根底には、口承伝統と関わる作品を載せた写本は基本的にディクテーションでできたという固定観念がある。だがここで対象とする „Buch von Bern“ は文字文化の影響を強く受けた作品であり、口承性だけに注目しては問題を十分にはとらえきれない。たとえば同じく英雄叙事詩である „Nibelungenlied“ 等と比べて、この作品の作者／編者が初めから Buchform をたいへん強く意識していたことは、次のような典拠表示 (Quellenberufung) に如実に現われている：

…als uns daz buoch seit, (v. 2028)

(我らにこの書が語るところによると)

こうした表現は本文中にきわめて頻繁に現われ、純粋な口承文芸だけでなく、最初から文字によって構成された作品にも Formel が用いられることを証すのだが、³⁹⁾ その一方でこれは、口承文芸が文字で定着させられる際、あるいは口承素材をもとにした文字文芸が新たに作り出される場合、先行する口承テキストとは異ったものが新たに形成されることをも明らかにする。そこで研究史のしめくりとして、Dietrichepik において文字文化の果たした役割に光をあてた Heinzle の見解をとりあげる。⁴⁰⁾

彼の考え方は、基本的には Bowra の口承性に重きを置いたものと重なる部分が多い。両者の違いは、作品を構成する手段が音声言語か文字言語かということである。つまり口承文芸で矛盾の原因になると Bowra の推測したことが、

39) 註 32) を参照されたい。

文字文芸でも起こると Heinzle は考えているのである。彼の考察の出発点は、①Dietrichepik が（口承の素材を用いてはいても）おしなべて文字文芸であること、②口承文芸にみられるような同一テキスト内の不一致⁴¹⁾が、初めから特定の個人によって構成されたもの（例えば Wolfram や Hartmann の作品）にも現われるということ、⁴²⁾そして③こうした「創作文芸」(Kunstdichtung) が朗詠形式の上演を念頭に置いてつくられているということである。これらの論拠により Heinzle は、まず不一致点が成立する主要な理由を文字によらない伝承の中に見出そうとするのは正しくないと考えた。⁴³⁾ 一方彼は、矛盾を形成せしめる要因が作品を構成するし方にもあるとみている。Heinzle によれば、当時の英雄叙事詩の作者／編者たちはいわゆる「構造の非制限性」(strukturelle Offenheit) の原理に従って作品を形づくった。⁴⁴⁾ このジャンルでは、一定のおおまかな枠組みの中で比較的自由に素材を埋め込んで語りが進められてゆく。だから全体構造と共通のテーマである限り、あるいはその構想を妨げない限り、ある素材を起点として任意の方向に様々なエピソードを延々と重ねることが（一応）可能である。さらに Heinzle は「描写の厳密さ」(Punktualität der Darstellung) という性質も挙げる。これは先の「非制限性」があって初めて成り立つのだが、個々の素材の内容をできるだけ厳密に描写しようとするもので、全体の流れから大きく逸脱するのではない限りはエピソードそれぞれに独自性を持たせるかのような特徴である。前後の脈絡に混乱・齟齬が生じるのを

40) Heinzle の総合的研究 (1978) の主な対象はいわゆる「Dietrich の冒険叙事詩」(aventiuerehafte Dietrichepik) であり、これに比して伝承前史が長くかつ中世盛期の素材をとり入れた度合いの少ない「ディートリッヒの歴史叙事詩」はいささか異なるジャンルとして（ひとまず）はずされている。しかし以下で明らかのように、口承伝統と文字文化の融合についての彼の見解を、ジャンルの小さな違いを理由にここで応用することを放棄する必要はまったくない。

41) Heinzle は「不一致」(Unstimmigkeit) を「矛盾」(Widerspruch) の上位概念として用いている。(Heinzle a. a. O., S. 167 ff.)

42) この問題については Campbell (1987) も分析を行っている。

43) Heinzle a. a. O., S. 169 f.

44) Ibid., S. 204 ff. 特に 221, 230 - 232.

Heinzleはこの性質に帰している。筋の一貫性に細心の注意を払わず、辻褄を合わせる十分な努力がなされていないことの背景には、作者／編者たちの間に全体の流れだけでなく個々の語り素材にも大きな注意を払おうとする傾向があったのだろう。こうした独自性は彼らにとっては語りの長所でもあった。先の „Kudrun“ の — ある兵力が小さくなったり大きくなったりする — 矛盾を Heinzleはこの点から説明する。即ち「特定の要素は全体の脈絡を無視して埋め込むことができる」のである。⁴⁵⁾ その意味でこうした現象は一種のスタイルであるとまで彼は言う。⁴⁶⁾ もちろんこの説明は彼自身もいうようにあくまで一般論であり、個々の具体例はそれぞれ特別に検証しなければならない。⁴⁷⁾

いずれにせよ Heinzle も Bowra と同様「矛盾」に対する考え方が当時は今日と違っていたとみている。„Ilias“ の Pylaimenes の例については Heinzle も Bowra と同じ見解である。また „Nibelungenlied“ で Worms の森にライオンが現われるのを、⁴⁸⁾ 古典文学の狩猟場面に付き物だったからここでもそのパターンを踏襲したと考えている。つまりいずれも素材の独自性に帰しているのである。⁴⁹⁾

なお Heinzle は、写本に残ったテキストの直接の元になったものが口承形式で先行して存在していたかという問題については非常に懐疑的だが、⁵⁰⁾ Curschmann は書記伝承と並行して口頭伝承もやはり存在した筈だとして⁵¹⁾ この見解に反対し、Buchform の成立については両方の要素を考慮すべきだと考えている。

45) Ibid., S. 171.

46) Ibid., S. 170.

47) Ibid., S. 173.

48) „Nibelungenlied“, Str. 935 f.

49) Heinzle a. a. O., S. 172 f.

50) Ibid., S. 76 f.

51) たとえば Curschmann a. a. O., S. 34.

IV Alphart の死の分析

まず „Buch von Bern“ の成立事情について考える。口承のみで伝えられていた段階の形を、即ち様々な口承素材・エピソードを再現して本稿の問題を解決するのはもはや不可能だが、少なくとも今日に残された写本の前段階を示唆しうる記述が作品内にいくつかみられる：

ir edele helde mære,/ wir sulnz alsô schaffen,/ daz leien unde phaffen/
von dirre vreise mære sagen,/ als ez noch hiute welle tagen,/ daz man sô
vil der tôten/ vinde nider verschrôten. (v. 6428 – 6434)

(位高き勇者たちよ、俗人や聖職者たちが、今日の陽が昇るころ多数の者が傷ついて死んでいたとこの難事について語るようにしてやろう。)

この記述は、古代から中世当時に至るまでの歴史の中で英雄歌謡や叙事詩がどのようなことを契機にしてつくられたかを暗示する。もの珍しいこと、たとえば大規模な戦いがあると、様々な人たちがそれについて詩をつくり、いわば合戦譚として語り継いだであろう。⁵²⁾ このような場合に作者、とりわけ各地の宮廷や教会等を渡り歩きそこで芸を披露して生計を立てた職業詩人が競合すれば、様々なヴァリエーションが生じたことはまちがいない。このような歌謡や叙事詩は、量的にみて短篇から長篇まで様々なものがあったろうが、短かいものが何らかの理由でまとめられ、比較的長いものがいわば再生産されることがあった：

52) これに類するものとして „Alpharts Tod“ Str. 254, 3 – 4 がある：

wær ez daz wirn betwungen und wurde er danne erslagen,
von unsern untriuwen müest man immer singen unde sagen.

(もし我々 [ハイメとヴィテゲ] が彼 [アルプハルト] を [二人で] 倒して彼が死んだなら、我々の非道ぶりについてこれからずっと歌われ語られ続けるにちがいない。)

der uns daz mære zesamne slôz,/ der tuot uns an dem buoche kunt,/ daz
weder ê noch bi der stunt/ nie hôchzit sô schoene wart. (v. 1840 – 1843)
(この話をまとめてくれた者が我らにこの書で伝えるところによると、これほど
立派な婚礼はそれ以前にもその当時もなかった。)

In der zit was Alphart komen,/ als ich vür wâr hân vernomen/ und an
den buochen gelesen. (v. 6323 – 6325)

(その時アルプハルトがやって来た。私が事実として聞き、かつ諸々の書で読んだ
ところによれば。)

これらの表現は、作品としての „Buch von Bern“ が成立する以前に色々な口
頭伝承があっただけでなく、既に文字伝承（つまり羊皮紙に書かれたもの）も
存在し、それらが——直接にせよ間接にせよ——この作品の典拠となったこと
を示唆している点できわめて重要である。即ち様々なエピソードを耳と目から
とり入れることによって作者／編者がこの作品をまとめ上げたと考えられるの
である。⁵³⁾ ただし注意すべきは、これらの記述はあくまで作品の成立過程を推
測させるだけであって、ここに出たいわゆる Wahrheitsbeteuerung（語られ
ることが真実であるという語り手の誓い）としての機能に信をおいてはならな
いということである。⁵⁴⁾ 傾向としては、こうした語り手の誓いはむしろ些細な、
重要でないことの記述になされることが多いのだが、⁵⁵⁾ いずれにしてもこれら
の典拠表示（Quellenberufungen）は、諸々の伝承が集められ——おそらくあ
る程度加工・処理もされ——てこの 10152 行に及ぶ作品が作られたことの有力
な証拠を提示している。

53) 註 51) を参照されたい。

54) 詩節形式で構成された英雄叙事詩に現われる語り手の機能を調査した Fluss による
と、こうした類の Wahrheitsbeteuerungen は決して真に受けてはならない。
(Fluss 1971, S. 213)

55) Ibid., S. 261.

Alphart の二度の戦死もこうした事情を背景に起きた矛盾である。では先に挙げた①作者／編者の単純な誤り、②元来別々にあった素材が口承段階で（手際悪く）まとめられたことによる（Bowra 説）、③作者／編者が書く時に別々の素材を集めたために生じた（Heinzle 説）という理由のうちのどれがもっとも大きな説得力をもつだろうか。

理由を説明する確かな証拠がなく断定もできない以上、上記のどれも一応可能ではある。①の単純な誤り説も無視することはできない。たとえば、④ Alphart が既に Pitrunc に殺されていることを口承詩人あるいは Buchform の作者／編者が「忘れて」Reinher ともう一度戦わせたり、あるいは逆に⑤後に Reinher と戦って死ぬという筋が既にあるにもかかわらず「忘れて」Pitrunc に殺させたこともありえないことではない。特に Reinher によって倒される場面では、Alphart は死んだ 8（9）人のうちのひとりとして単に名を挙げられているだけであるから、④の可能性が比較的大きいとはいえる。だが前章でみたように、様々な素材を重ねる段階で生じた矛盾が「誤り」とは意識されずに残ったとみる考え方、とりわけ Heinzle の説がここでは一番現実に即した論である。

de Boor らの指摘するように、„Buch von Bern“ は全体のまとまりが悪く、統一もとれていないいわば「集塊」(Konglomerat) のような作品である。⁵⁶⁾ 同類の題材をもちながらも全体のまとまりがはるかに良い „Rabenschlacht“ と比べて、⁵⁷⁾ 作者／編者の構想の立て方が悪かったのはまちがいない。⁵⁸⁾ しかしこうした構造は逆に、„Buch von Bern“ では様々な素材が原型により近い形で現われていることをも意味する。作品の構成手順は諸々の素材をまず配列することから始まるからである。仮に、今日に残る写本のテキストにかなり近い口

56) de Boor a. a. O., S. 149.

57) Hoffmann a. a. O., S. 170.

58) Curschmann (1976, S. 382) は「この作品にはまとまった構想がなく、素材を統一し、かつこれを貫く計画性も欠けている」と述べている。

承形がその原形として存在していたとしても、文字で定着させられる段階で少なからぬ変化——これは削除や付加、改変等を含む——が生じたであろうから、これに伴う現象はまず作者／編者の行動と結びつけて考えるべきだろう。繰り返すが、彼にとって Alphart が二度死ぬことは重大な矛盾ではなかった。それは、Dietrich らがある時 Pitrunc と戦い、まもなく Reinher と戦うという「筋の展開」におおいに隠されてしまう類のものだった。この作品は様々な、元来独立して伝えられていたエピソードがまず集められ、さらに時間の経過と出来事の順序が揃うように構成されたもので、いわばそれらの素材を積み重ねることで筋を進行させたのである。⁵⁹⁾ しかしそのまとめ方が（今日の尺度で測ると）不十分であり手際もうまくなかったため、Alphart の死に代表されるような不統一が生じてしまった。⁶⁰⁾ いわば二つの要素の衝突 (Kollision zweier Erzählelemente) である。⁶¹⁾ とはいえそのまとめ方が十全である必要はなく、Publikum の方も矛盾を矛盾としてとがめることはなかった。受容者自身の読書によらない、少なくとも中世後期までの音声を媒体とした上演形式においては、こうした些細な矛盾に気づかれることはめったになく、あっても気にしないようなゆとりが彼らの間にあったと考えて差し支えあるまい。その背景の一方には、作品全体を一晩では最後まで語り尽くせないという外的条件があった。「上演の夕べ」が何夜にもわたって初めて結末に至るのであれば、それだけ多くの中断を含むことになり、筋の細部にはその分関心が薄くなるという傾向が生じたであろう。⁶²⁾ 他方聴衆自身の間にも内的条件があった。彼らの意識の中に「素材の多様性」に対する興味や期待があり、⁶³⁾ これらが先のいわゆる「構

59) Vgl. ibd. S. 381.

60) v. 8000 に出る Heinrich der Vogelære がこの作品の編者か、あるいはこの行の前後をまとめただけの者かという問題にまだ定説がない以上、ここでいう不手際を彼有能力を結びつける必要はない。Vgl. Curschmann a. a. O., S. 381.

61) Heinzele a. a. O., S. 231 等。

62) 仮に 1000 行朗ずるのに 1 時間かかるとすると、全体で 10 時間以上かかる計算になる。Vgl. Linke 1968, S. 158. また Bumke a. a. O., S. 704.

造の非制限性」や「描写の厳密さ」の下地となったと考えられるのである。

宮廷叙事詩 (höfische Epik) や恋愛歌謡 (Minnesang) 等のような (口承伝統でなく) 個人にその起源が帰する創作文芸と違い, ここで問題とする英雄叙事詩にたとえば Minne に関する記述がきわめて少ないという事実は, Publikum の間に様々な層や傾向があったことを示唆する。⁶⁴⁾ „Buch von Bern“ を書の形にまとめるきっかけを与えた人物 (たち) が「英雄もの」に大きな関心をもっていたことは確かだろう。彼 (ら) が同時に「宮廷もの」等をも愛好したかどうかは別にして, 主に 12 世紀後半以降特にフランスから入ったジャンルとは異なる, ゲルマン民族の伝統的なものを指向し続けた層は存在したと思われる。たとえば Marner が挙げた彼の (聴衆の求めに応じた) 上演リストは圧倒的にこの伝統の中から出た素材で埋まっている。⁶⁵⁾ こうした Publikum の期待に答えるため, 伝統の担い手である口承詩人はもちろん, 読み書きのできる作者/編者たちも様々な素材を集め, 加工・処理・再生産していったに違いない。⁶⁶⁾ そしてその際, 彼らには既にある素材を自らの「作品」の適切な場所に組み込む自由があった反面, その素材の内容を変えない傾向もあった。伝統的な, つまり既に長い間の使用によっていわばパターンができたため使う側の主体性を封じ, 逆に彼を拘束するような場合もあったのである。Alphart の Pitrunc や Reinher との戦いについても, こうした傾向に基づいてできるだけ遺漏なく伝える努力がなされたと考えられる。そしてさらにその背後には, 語りの素材

63) Stackmann a. a. O., S. XXV. Vgl. Heinzle a. a. O., S. 173; Brévart 1986, S. 328.

64) Szklenar/Behr (1981, Sp. 1180) の宮廷の聴衆の分化に関する記述はこの点の参考になろう。

65) Der Marner XV, v. 260 – 280. Vgl. Curschmann 1980, S. 34. なお Marner が主として短編をもした格言詩人 (Spruchdichter) であり叙事詩人でないということ割りを引いても, 彼自身の発言であれば示唆するところは大きいと言うべきである。

66) 但し彼らのもつ素材の蓄えが無甚蔵でない以上, これが逆に彼らの活動の自由に一定の限界を与えていたことも忘れるべきでない。

が多様に富んでいることを高く評価する精神があった。これは一方で伝統に培われた典拠を尊重する土壌を養い、「描写の厳密さ」の原理を生んだが、同時に「集大成意欲」とでも呼ぶべき傾向をも招来した。そしてこれが「構造の非制限性」を支えるもののひとつになったのであるが、この集大成意欲は単にひとつの作品をまとめ上げるにとどまらない。„Buch von Bern“ と „Rabenschlacht“ が現存4写本すべてで並べて — Doppellepos として — 伝えられているという事実は、この「意欲」が異なった作品を引き寄せる機能をもつことも示している。これらの要素が総合的にかみあうことで、様々な問題を内包する作品が成立したのであるが、さらに言えば個々の語り素材は、まとまった作品の誕生と同時に使命を終える訳ではない。また聴衆たちの関心・期待も作品成立によって解消する訳ではない。こうした状況は、矛盾が後に訂正されたり、逆に新たな矛盾が生じたり、更には矛盾がそのまま受け継がれてゆく事態をも生ぜしめたであろう。それは印刷文化が普及し、同時に文盲率が低化する近代まで続く。人々の関心や期待が「作品」の成立した後でも、並行して存在する伝承や資料を既存の書の中にとり入れる力となり続けたと考えられるからである。⁶⁷⁾

なお元来口承文芸だったものが文字で定着した際、そしてその後の書記伝承過程で生じた混乱に関しては、既にいくつかふれたように Germanistik 以外にも様々な分野で研究があり、日本でもたとえば『平家物語』の諸本研究に優れた業績が上げられている。いずれ稿を改めてそれらとの比較を行う予定である。

67) このようなプロセスは、長い年月にわたって様々な手が加わるという意味でいわばテキストの多層性を生むことになるが、これは編者が複数になること、そして彼らにも多層性のあることをも意味する。この層は時代が下る程厚くなり、テキストも宮廷叙事詩等と比べてはるかに大きな変動を被ることになる。

参 考 文 献

(雑誌・シリーズ名の略号については慣用に従う)

„Buch von Bern“ の校訂版

Deutsches Heldenbuch. 2. Teil. Alpharts Tod, Dietrichs Flucht, Rabenschlacht. Hrsg. v. Ernst Martin. 2., unveränderte Aufl. Dublin/Zürich 1967. S. 55 – 215.

その他の作品の校訂版・翻訳

„Alpharts Tod“ : Deutsches Heldenbuch. 2. Teil. Alpharts Tod, Dietrichs Flucht, Rabenschlacht. Hrsg. v. Ernst Martin. 2., unveränderte Aufl. Dublin/Zürich 1967. S. 1 – 54.

『イーリアス』: ホメーロス: 『イーリアス』上・中・下 (呉茂一訳) 東京 (岩波書店) 1953 – 1958.

『カレワラ』: 『カレワラ』上・下 (森本覚丹訳) 東京 (講談社学術文庫 612 f.) 1983.

„Der Marner“ : Der Marner. Hrsg. v. Philipp Strauch. Mit einem Nachwort, einem Register und einem Literaturverzeichnis von Helmut Brackert. Berlin 1965. (Photomechanischer Nachdruck der Ausgabe Straßburg 1876)

„Nibelungenlied“ : Das Nibelungenlied. Nach der Ausg. v. Karl Bartsch hrsg. v. Helmut de Boor. 21., revidierte u. ergänzte Aufl. Wiesbaden 1979.

„Rabenschlacht“ : Deutsches Heldenbuch. 2. Teil. Alpharts Tod, Dietrichs Flucht, Rabenschlacht. Hrsg. v. Ernst Martin. 2., unveränderte Aufl. Dublin/Zürich 1967. S. 217 – 326.

„Der Rosengarten zu Worms“ (Fassung D): Die Gedichte vom Rosengarten zu Worms. Hrsg. v. Georg Holz. Tübingen 1982. (Nachdruck der Ausgabe Halle 1893) S. 69 – 166.

研究文献

Bäumel, Franz H./Donald J. Ward 1967: Zur mündlichen Überlieferung des Nibelungenliedes. In: DVjs 41. S. 351 – 390.

Bäumel, Franz H. 1987: Mittelalter. In: Geschichte der deutschen Literatur. Bd. 1: Vom Mittelalter bis zum Barock. Hrsg. v. Ehrhard Bahr. Unter Mitarbeit v. F. H. B., Friedrich Gaede und Gerd Hillen. Tübingen. (UTB 1463) S. 1 – 244.

- Bannert, Herbert 1979: Homer. Reinbek. (rm 272)
- de Boor, Helmut 1962: Die deutsche Literatur im späten Mittelalter. Zerfall und Neubeginn. München. (Geschichte der deutschen Literatur. Von den Anfängen bis zur Gegenwart. Von H. d. B. und Richard Newald. Bd. 3/1)
- Bowra, Cecil Maurice 1964: Heldendichtung. Stuttgart. (Original: Heroic Poetry. London² 1961)
- Brackert, Helmut 1963: Beiträge zur Handschriftenkritik des Nibelungenliedes. Berlin.
- Brévert, Francis B. 1986: Das Eckenlied. Mhd./Nhd. Text, Übersetzung und Kommentar v. F. B. B. Stuttgart. (RUB 8339)
- Bumke, Joachim 1986: Höfische Kultur. München. (dtv 4442)
- Campbell, Karen J. 1987: Some Types of Incoherence in Middle High German Epic. In: PBB (Tübingen) 109. S. 350 – 374.
- Curschmann, Michael 1967: Oral Poetry in Mediaeval English, French and German Literature: Some Notes on Recent Research. In: Speculum 42. S. 36 – 52.
- 1976: Zur Struktur und Thematik des Buchs von Bern. In: PBB (Tübingen) 98. S. 357 – 383.
- 1980: Rezension zu J. Heinze: Mittelhochdeutsche Dietrichepik, München 1978. In: AfdA 91. S. 32 – 36.
- 1986: Sing ich dien liuten miniu liet, ... Spruchdichter als Traditionsträger der spätmittelalterlichen Heldendichtung? In: Akten des VII. Internationalen Germanisten-Kongreß Göttingen 1985. Bd. 8. Tübingen. S. 184 – 193.
- Fluss, Ingeborg 1971: Das Hervortreten der Erzählerpersönlichkeit und ihre Beziehung zum Publikum in mittelhochdeutscher strophischer Heldendichtung. Hamburg. (HPS 9)
- Fromm, Hans 1974: Der oder die Dichter des Nibelungenliedes? In: Atti dei Convegni Lincei I: Colloquio italo-germanico sul tema: I Nibelunghi. Rom. S. 63 – 74.
- Gottzmann, Carola L. 1987: Heldendichtung des 13. Jahrhunderts: Siegfried-Dietrich-Ortnit. Frankfurt a.M. (Information und Interpretation 4)
- Haymes, Edward R. 1977: Das mündliche Epos. Stuttgart. (Sammlung Metzler 151)

- Heinzle, Joachim 1978: *Mittelhochdeutsche Dietrichepik*. München. (MTU 62)
- 1979: Rezension zu E. R. Haymes: *Das mündliche Epos*, Stuttgart 1977. In: *ZfdPh* 98. S. 114 – 116.
- Hoffmann, Werner 1974: *Mittelhochdeutsche Heldendichtung*. Berlin. (Grundlagen der Germanistik 14)
- Holtzmann, Adolf 1860: Aus der Colmarer Liederhandschrift. In: *Germania* 5. S. 444 – 448.
- Jiriczek, Otto Luitpolt Karl 1892: Die innere Geschichte des Alphartliedes. In: *PBB* 16. S. 115 – 199.
- Kuhn, Hugo 1980: ‚Dietrichs Flucht‘ und ‚Rabenschlacht‘. In: *Die deutsche Literatur des Mittelalters. Verfasserlexikon*. 2. Aufl. Bd. 2. Berlin/New York. Sp. 116 – 127.
- Linke, Hansjürgen 1968: *Epische Strukturen in der Dichtung Hartmanns von Aue*. München.
- Rosenfeld, Hellmut 1978: ‚Alpharts Tod‘. In: *Die deutsche Literatur des Mittelalters. Verfasserlexikon*. 2. Aufl. Bd. 1. Berlin/New York. Sp. 258 – 261.
- 1984: Dietrich von Bern/Dietrichdichtung. In: *Reallexikon der Germanischen Altertumskunde*. 2. Aufl. Bd. 5. Berlin/New York. S. 425 – 442.
- Schupp, Volker 1979: *Heldenepik als Problem der Literaturgeschichtsschreibung. Überlegungen am Beispiel des ‚Buches von Bern‘*. In: *Deutsche Heldenepik in Tirol*. Hrsg. v. Egon Kühebacher. Bozen. (Schriftenreihe des Südtiroler Kulturinstitutes 7) S. 68 – 96.
- Stackmann, Karl 1980: *Kudrun*. Hrsg. v. Karl Bartsch. Neue ergänzte Ausgabe der 5. Aufl. überarbeitet u. eingeleitet v. K. S. Wiesbaden.
- Szklenar, Hans/Hans-Joachim Behr 1981: ‚Herzog Ernst‘. In: *Die deutsche Literatur des Mittelalters. Verfasserlexikon*. 2. Aufl. Bd. 3. Berlin/New York. Sp. 1170 – 1192.
- Wisniewski, Roswitha 1986: *Mittelalterliche Dietrichdichtung*. Stuttgart. (Sammlung Metzler 205)
- Zimmer, Uwe 1972: *Studien zu ‚Alpharts Tod‘ nebst einem verbesserten Abdruck der Handschrift*. Göppingen. (GAG 67)

Alphart fällt zweimal.

— Zu einem Widerspruch im „Buch von Bern“ —

Tatsuo TERADA

Im „Buch von Bern“ wird zweimal davon berichtet, daß Alphart, ein junger Held aus der Gefolgschaft Dietrichs von Bern, tapfer kämpft und fällt: Er wird zunächst von Pitrunc getötet (v. 9524 ff.) und dann aber als einer der von Reinher Erschlagenen erwähnt (v. 9700). Forschungsgeschichtlich geht es dabei allerdings nicht um zwei verschiedene Personen, obwohl der Mann in „Alpharts Tod“ noch auf eine andere, dritte Art den Tod findet: Witege und Heime überfallen ihn gleichzeitig und bringen ihn niederträchtig um. Diese drei Beschreibungen von Alpharts Tod führen mit Recht zur Annahme, daß recht unterschiedliche Versionen nebeneinander existierten. Dazu ist es noch gut möglich, daß das epische Muster für seine Handlung dem Mittelalter entstammt: Tapfere Heldentat — tragischer Tod — Dietrichs Klage um ihn. Dennoch bleibt zumindest die Frage bestehen, wie der Held in einem geschlossenen Werk zweimal hintereinander sterben kann. Unter welchen Bedingungen die zwei Versionen zusammengestellt werden konnten, dieses Problem gilt es also zu lösen.

Die ältere Forschung wollte die Ursache solcher Unstimmigkeiten im allgemeinen etwa auf Kontamination zweier Quellen, Vergessen einer früheren Angabe, Verlust des logischen Zusammenhangs beim Dichter selbst usw. zurückführen. Das ist alles auch sicher geschehen. Heute argumentiert man bei einem solchen Phänomen aber meist nicht mehr mit den erwähnten Dichter- und Schreiberfehlern. Denn es ist inzwischen sehr fragwürdig, ob der Dichter/Schreiber und das Publikum des Mittelalters dies überhaupt für widersprüchlich hielten: Bei den recht verworrenen Angaben einer Heereskraft in der „Kudrun“ (Str. 282 – 455) etwa stellt sich heraus, daß es diesen Leuten bis zu einem gewissen Grad gleichgültig war, ob in einer Erzählung alles genau ineinander griff und damit das Detail in ein angemessenes Verhältnis zum Ganzen kam. Unter solchen Bedingungen braucht man ein anderes Kriterium, um eine Lösung zu finden.

Bowra macht auf die Entstehungssituation der mündlichen Dichtung aufmerksam und erklärt die Widersprüche in den heute vorliegenden Texten

mit Hilfe der ‚theory of oral-formulaic composition‘. Nach ihm konzentriert sich der Dichter so stark auf das Nächstliegende, daß er leicht vergißt, was vorhergegangen ist, oder noch nicht ganz voraussieht, was später kommen wird. Und was der Dichter selbst nicht bemerkt, wird wahrscheinlich auch vom Publikum nicht bemerkt. Der Widerspruch wird erst dann erkannt, wenn das Gedicht einmal aufgeschrieben worden ist und kritischen Leseraugen ausgesetzt wird. Bowra nimmt weiter an, daß aus einem populären Stoff sich viele Varianten, die auf einem Handlungsmuster im oben erwähnten Sinn beruhen, entwickeln und daß man sie sogar eventuell wieder zu einem einzigen neuen Gedicht kombiniert. Dieser Ansicht nach gilt das Alphart-Bild im „Buch von Bern“ als Ergebnis der Zusammenfügung zweier mündlichen Varianten. Dabei aber spielt das eigene Gewicht von Pitrunc und Reinher auch sicher eine gewisse Rolle, da die beiden Helden ihrerseits in der getroffenen Szene einen Existenzwert, d.h. ein eigenes Muster zu haben scheinen. Das Zustandekommen des Widerspruchs ließe sich also durch die Komplexität der verschiedenen Motivhäufungen erklären.

Bowras Argumentierung fehlt jedoch die Perspektive auf den Verschriftlichungsprozeß der mündlichen Dichtung. Aus einer oberflächlichen Lektüre wird schon klar genug, daß das „Buch von Bern“ stark auf die Schriftkultur orientiert ist, und verschiedene Merkmale lassen sich demgemäß auch als Textänderungen betrachten, die in der vorher- und nebenhergehenden mündlichen Tradition nie hätten vorkommen können. (Z.B.: „als uns daz buoch seit“...).

Im Hinblick auf die Schriftlichkeit modifiziert Heinzle Bowras Ansichten und stellt eine überzeugendere These auf. Er nimmt für die Dietrichepik die ‚Punktualität der Darstellung‘ und die ‚strukturelle Offenheit‘ als Grundlage der Konstituierung und Umbildung der Texte an. Diese erlaubt etwa verschiedene Episoden in einer beliebigen Richtung zu häufen und zu schichten, um die Texthandlung weiter zu entwickeln, und verschafft auch Raum dafür. Dagegen ist jene dazu geneigt, die einzelne Episode genau und eigenständig zu schildern. Die beiden Eigenschaften greifen ineinander und lassen somit immer wieder Unstimmigkeiten erscheinen. In Anlehnung an Heinzles Argumentierung kann man Alpharts zweimaligen Tod — wie bei der Mündlichkeitsthese — als Folge

der schriftlichen Zusammensetzung mehrerer eigenständigen Episoden betrachten — eine Kollision verschiedener Erzählelemente.

Was unterstützt nun den Willen zu dieser Tätigkeit? Da gibt es sicher die Hochschätzung der stofflichen Vielfalt. Sie bewirkt Freiheit und Restriktion zugleich: Einerseits ruft sie im literarischen Kreis Sammeleifer und -wut hervor und motiviert damit die Entstehung eines großen Werkes aus unterschiedlichen Stoffen. Andererseits gibt sie doch auch den Respekt vor der einzelnen Quelle ein, verbietet eventuell die Textveränderung und dient so der Überlieferungstreue. Die ganze Entwicklung hängt also eng zusammen mit dem Publikum, dessen Geschmack gewissermaßen die Entscheidung beeinflusst, welcher Stoff ins Werk genommen und/oder davon ausgeschlossen werden sollte. (Dabei darf man das Repertoire des Produzenten auch nicht aus den Augen lassen.) Der Vorgang ist außerdem nicht einmalig. Die Erwartungen und das Interesse des Publikums lösen sich nämlich noch nicht mit der Entstehung eines geschlossenen Werkes auf. Die Funktion einzelner Stoffkreise ist auch mit ihrer Einfügung in die Großepik noch nicht endgültig determiniert. Das Ganze schafft die Triebkraft für weitere Neu- und Umbildungen der Texte. Man darf sich vorstellen, daß ein Widerspruch nicht nur in der mündlichen, sondern auch in der schriftlichen Überlieferung bald vorkommt, bald verschwindet und bald bestehenbleibt. In dieser Gattung gibt es also kein ‚Original‘: Es gibt soviele Originale, wie es Fassungen gibt. Und diese Tendenz dauert bis in die Neuzeit an, wo die Verbreitung des Druckwesens und die Abnahme des Analphabetentums zusammenzuwirken und somit die mündliche und handschriftliche Kultur zu vertreiben beginnen.

Der Vergleich mit einer altjapanischen Heldendichtung soll folgen.